

「明治の技術官僚」近代日本をつくった長州五傑

柏原宏紀著：中公新書

今年（2018年）は明治元年から数えて150年にあたる年。各地で「明治150年」記念のイベントが開催されている。

本書は、技術立国日本の礎を築いた人々として、長州藩（今の山口県）出身の五人の足跡を中心に明治時代の技術への取り組みを紹介したもの。

「長州五傑」と呼ばれる伊藤博文、井上馨、山尾庸三、井上勝、遠藤謹助は先進技術を習得すべく幕末に密航しイギリスに渡った。彼らの目標は「生きた器械」（知識や技術を身につけた存在）となり、藩の役にたとうとしたもので、一人当たりの渡航費は約千両。余りの高額に関係者は驚愕したそうだ。個人では到底支払える金額ではなく、五千両は藩が立替えた。五名のうち伊藤博文（後の首相）、井上馨（後の外務大臣）は政治家として有名だが、他の三名はほとんど知られていない。それはいずれも技術官僚だったからと著者はいう。技術官僚とは、理系の知識や技術によって政策の立案や実施を担う存在であり、現代の技官の先駆けとなった。井上勝は鉄道や鉱山が専門で、東京駅前に銅像が建てられているが、山尾は器械を勉強した造船の専門家、遠藤は造幣に関する専門家であったが一般にはほとんど知られていない。彼らの留学期間は三年から五年であったがこの間に身につけた高度な専門知識は日本の近代化に大きく役立った。

時代を振り返ると、海外から招聘した外国人たちの中に五傑が登場したのが明治元年。その後、洋行経験者を中心に政策を進めた明治十年前後。さらに技術が進展していく中、国内で専門教育を受けた世代が活躍するようになる明治二十年代という官僚機構の変遷を、本書はコンパクトにまとめている。

外国人を雇用すると費用が嵩むので、渡航経験のある人材を登用するのは明治新政府の方針でもあった。鉄道建設、通貨発行、造船所建設など官僚の役割は多岐にわたった。

官僚組織の原型はこの時代に培われた。昨今、官僚の不祥事が相次ぐが、組織の見直しのために先人の足跡を振り返るのに今年（2018年）は格好の機会ではないだろうか。

（エネルギーレビュー2018年9月号掲載）

（シニアネットワーク会員 齋藤 隆）